に花山寺におはしまして、御出家入道せさせ給へりしとぞ、略○中　あはれなる事は、おりおはしましけるよは、ふぢつぼのうへの御つぼねの小ぞよりいでさせ給ひけるに、有明の月のいみじうあかゝりければ、見證にこそありけれ、如何あるべからむとおぼせられけるを、さりとてとまらせ給ふべきやう侍らず、神璽寶劔わたり給ひぬるにはと、あはたのおとゞ兼○道　さはがし申給ひける事は、まだ御門出させ給はざりけるさきに、ゑんじほうけん手づからとりて、東宮條○一の御方に渡し奉り給ひてければ、かへりいらせ給はん事はあるまじくおぼして、ゑか申させ給ひけるとぞ、さやけきかげをまばゆくおぼしめしつる程に、月のおもてにむら雲のかゝりて、すこしくらかりければ、わが出家は成就するなりけりとおぼせられて、あゆみいでさせ給ふ程に、こき殿の女御の御ふみの日ごろやりのこして、御身もはなたず御覽じけるをおぼしめしいでゝ、ゑばしとてとりにいらせ給ひけるほどぞかし、あはた殿のいかにかくはおぼしめしたちぬるぞ、たゞ今すぎなばおのづからさはりぞも、いでまうできなんとそらなきし給ひける、略○中　花山寺におはしましつきて、御ぐしおろさせ給ひてのちにぞ、あはた殿はまかりいでゝ、おとゞにもかはらぬすがた今一度見え、かくとあんないも申て、かならずまゐり侍らんと申給ひければ、われをばはかるなりけりとてこそ泣かせ給ひけれ、あはれに悲しきことなりな、日頃よく御弟子にて侍らはんとちぎりすかし申給ひけんがおそろしさよ、東三條殿○道兼父兼家は若さる事やし給ふと危さに、さるべくおとなしき人々、何がしかゞしといふいみじき源氏の武者たちをこそ御送りにそへられたりけれ、京の程はかくれて、堤の渡りよりぞうちいでまゐりける、寺などにてはもしおして人などやなし奉るとて、一尺ばかりのかたなぞもぬきかけてまもり申けるとぞ、

〔古事談一王道后宮〕花山院御出家、寛和二年六月廿三日事也、略○中　此御出家之發心は、弘徽殿女御恒德公（藤原爲光）女　鍾愛之間忽薨逝、仍御悲歎之處、町尻殿○藤原道兼　得便宜書世間無常法文妻子珍寶及王位臨命終時不隨者等文